

ちょっと寄り道してみよう

|       |                                           |
|-------|-------------------------------------------|
| 奨励    | 栗原 宏介〔くりばら・こうすけ〕                          |
| 奨励者紹介 | 日本キリスト教団奈良教会牧師<br>同志社大学キリスト教文化センター非常勤嘱託職員 |

見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。

（創世記 28章15節）

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

（コリントの信徒への手紙二 4章16―18節）

今朝も寄り道を・・・

皆さん、おはようございます。こんなに気持ちのよい日に、こうしてチャペル・アワーに足を運んでいただき、ありがとうございます。私も皆さんとともに、この時間を過ごすことかできて、とてもうれしく思っています。先ほど聖書をお読みいただき、お祈りを聞いているとき、目を瞑りながら、青空チャペルのこの場所で、爽やかな風を感じていると「ああ、このベンチに横になって眠りたいな」と思ったのが正直なところです。

「ちょっと寄り道してみよう」というタイトルをつけさせていただきました。今日、ここに来るときも、寄り道をしてきました。ガッツリ寄り道をするのを遅刻してしまいますので、寄り道しないようにしようと思ったのですが、朝、2人の息子を幼稚園と保育園に連れていくときに、上の息子が「あ、絵本かばん忘れた」と言うのです。一旦、家に戻って、その足でここに来ようと思って準備をして、もう一度、絵本かばんを持って幼稚園に出かけました。幼稚園では、いろいろなことが起こります。砂をかけられるとか、それは払えばまだよいのですが、この日は水をかけられるという出来事が起こりました。怒ったところで仕方がないので、もう一度やむなく家に帰りました。そのとき、洗濯機の中に洗い終わった洗濯物をそのままにしていたことを思い出したのです。幼稚園に行くときに洗濯機を回して帰ったところにできあがるので、干そうと思っていたのです。そういうことを忘れて、こちらに来ようとしたのです。家に戻ったおかげで、洗濯物を干すことができました。昨日のようにいきなり雨が降ってきたら、説教どころではなくなるのですが、きっと今日は良い天気なので大丈夫でしょう。これで私は夕方帰ってくる妻に怒られなくてすみます。水をかけられたのは、少しイラッとしましたが、あながち無駄ではなかったかなと思いました。

小さいころから寄り道大好き

私は小さいころから寄り道が大好きでした。小学校の帰り道も通学路は決められていたのですが、今のように集団下校がなかったので勝手に帰ることができました。いろいろな発見を寄り道の途中でしました。あるときには一人で、あるときには友だち数人と通学路を離れて、好き勝手にこんな道があるとか、こんなところにこんなものがあると発見しては、うろうろして、普通に歩いて帰ると15分のところを2時間くらいかけて帰っていました。小川に足を踏み入れてザリガニをとってみたり、沼にはまってみたり、足が抜けなくなったり、土手を降りることはできても登れなくなったり、そのへんに落ちている土管の中に隠れてみたら出られなくなったり、いろいろなことがありましたが、それなりに楽しく帰っていました。

たまに、先生に「こんな道を通って帰ってはいけない」と叱られることもありましたが、それはそれでよい経験として残っている思い出です。今でも寄り道は好きです。寄り道ついでに牧師をしているのかなと思うことがあります。私の父親は、完全にそう思っています。牧師は人生においての寄り道だと思っているのです。「全うな職につけ」と、よく言いますから。牧師は全うではないと思われているのです。思えば、私は同志社に行きたいなと何となく思っていました。中学、高校のとき、神学部に行こうなどとは、これっぽっちも思っていないませんでした。ましてや牧師になろうなどとは本当に、これっぽっちも思っていないませんでした。いろいろな寄り道の途中でいろいろな人に出会い、ふと足を路地に入ったところにあった教会に踏み入れたのです。そして神学部に行くことになっても、牧師になる気はありませんでした。そのつもりはなかったのです。全うな職につくつもりでいました。

けれども、教会や学校で、いろいろな出会いがありました。あるときは本、あるときは、人でありましたが、そんな出会いのなかで、ある意味で牧師しかないような状況になっていったというのが本当のところ。選択肢を絞り込んでいって、この道、ということになりました。

あくまでもそれは寄り道の一つの道だったわけであり。全うな道と思っていた道ではなかったわけでありました。小さいころから野球の選手になりたい、医者になりたい、というような夢を抱いていました。中学、高校のころは、舞台役者になりたいなと思っていました。

けれどもそういう道に進まずに、いま牧師として働いています。舞台役者になりたいという夢は、あながち捨てられたわけではなく、こうして説教壇が備えられて、メッセージを語ることができている、舞台があって演じることができる、ある意味、恵まれた状況にあると思うのです。

寄り道も無駄ではない

私のように小学生のころから寄り道をしていると、生き方までそういう生き方になるのかなと思いますが、皆さんはどうでしょうか。寄り道は、しておられましたか。

ゴルフ選手の石川遼君が「急がば回らず」と言っているのを聞いたことがあります。なるほど、と思いました。理に合っているし、合理的だと思います。急いでいたら、最短距離で行った方が速いに決まっています。急がば回れは本当なのかなということから、彼は「急がば回らず」ということで、活躍されている方だと思います。私などは基本的に急いでいませんから、回る必要も、回らない必要もなく、ただウロウロしているわけであり。そういうウロウロが大好きで、学生のときも、いろいろなところをウロウロしました。「こんなところにこんな路地がある」と入っていくと、ああ、こんな店があった、こんな素敵な場所があった、こんなよい景色が見られたとか、いろいろな発見があったわけであり。京都に行くと、こうして発見した店に、よく足を運びます。寄り道が足りないのかどうか、奈良に来てからはなかなかそういう、よい店がありません。私の寄り道力が足りないんだ、という余裕がないんだろうなと反省もしています。けれども学生のときには、いろいろな出会いや、素敵な景色や、心安らぐ本当に良い寄り道をしていました。

妻が学校に行っているんで、私が家事、育児を中心にしています。牧師の仕事は3番目か、4番目くらい、重点的にはそのようにしています。子どもたちを迎えにいきます。一通り家事をすませて、10分で帰れる道を1時間、2時間かけて帰ります。決まった道を行けばすぐなのに、あっちに行ったり、こっちに行ったりします。いろいろな寄り道をします。鹿がいると、見飽きているだろうと思うのに、いちいち感動するのです。時には「こんなところにザリガニがいる」とか、びっくりすることがあります。「こんなところに鹿がいるわけない」と思うところが鹿が出てきたりするのです。いちいちびっくりしています。子どもは、こんな時間があっていいなあ、と思います。きっと僕には見えないものが、いろいろ見えているのだろう、感動できているんだろうなと、思わされる出来事です。やはり寄り道は、無駄ではないのです。

学生の間は、寄り道できる環境が整っているんで、いろいろな寄り道ができると思います。こんなところに路地があるという本物の寄り道もあると思いますが、生き方として寄り道ができる時間の余裕があるのも学生時代の良いところです。そうした寄り道のなかに、実は真理というものがいろいろ隠されているなど最近、思います。

真理に至る道

「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」が、今学期の統一テーマです。

なかなか真理というのは、わかりづらいと思うのです。真理は一つ、真理に至る道は一つですと言えたらカッコいいですが、僕は、どうしてもそうとは思えないのです。真理はきっと人それぞれだし、それぞれの道を見つけ出して、その道を歩んでいる過程で何となく見えてくるものなのかなと思っています。なにが正しいという答えはないのだろうなと思っています。皆さんそれぞれが発見し、いろいろな経験、出会いを通して、真理自身も動いていく、あるいは流動的に変わっていくと思うのです。

そういうなかで、今日お読みいただいた新約聖書の箇所は、一つ大きなことを示していると思います。「コリントの信徒への手紙」はパウロという人が書いた手紙です。約2000年前に書かれた手紙です。パウロは非常に困難ななかで、キリスト教の教えを広めていたのです。その人がコリントにいる信徒に書いた手紙です。今日、読んでいただいた箇所の少し前にこんな言葉があります。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」（コリントの信徒への手紙二 4章8―9節）。四方から苦しめられて、途方に暮れて虐げられて、打ち倒されても、行き詰まらず、失望せず、見捨てられず、滅ぼされない、という証をしています。パウロはこうして生きてきたなかで、本当に大変だったけれど、こうして生きてくることができた、歩んでくることができたのだということを強く伝えているのです。四方から苦しめられ、八方塞がりになっても、道はあったということなのです。行き詰まらない。途方に暮れていても失望はなかった。希望があったということです。虐げられても見捨てられず、虐げられていても、苦しめられていても手を差し伸べてくれる人がいた。その存在があったということです。打ち倒されても、滅ぼされない。打ちのめされ、倒されても、こうして生き続けることができた、その事実を語っているわけです。

その根源的なものは何か。信じる気持ちであり、真理を見いだす気持ちであり、それを探究する力強い歩みであり、道が備えられているという確信だったのだろうなと思うのです。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」と語っている通りです。目に見える苦難や苦しみや痛みや途方に暮れるような状況、虐げられているような状況、打ち倒されている状況、本当に大変な状況のなかで、目に見えない部分、本当に備えられている道に出会い、希望の光という一つひとつのこと、出来事が、パウロ自身を生かしているのだということです。

どうしても、私たちは、見えるものに左右されます。経済力や、見た目や、学歴、最近はそういうものがどこまで通用するかどうか分かりませんが、そういうものに意外に左右されます。けれども、そうではない、目に見えない部分も、しっかり見ようではないか、見るのは難しいけれど、感じようではないかというすすめがありました。そういうなかに、きっと真理を見いだす、探究するに至る道があり、あるいはヒントが隠されているということであります。

### 道に迷っても

私自身、どうにもならない状況に陥ったことが何度あります。四方から苦しめられ、八方塞がりになり、途方に暮れていました。けれども、そのときにも手を差し伸べてくださる人がいたし、無理をしても教会に行ったりしたのです。「逃げる道ってあるんだな」、本当にそうだなと思ったのです。余裕がないと一つの道しか見えなくなってしまうのですが、隠された路地とか魅力的な道が、意外と一杯あるということに気づいたのです。四方から苦しめられても、行き詰まることのない道があるのです。真理に至る道は一つではありません。そして目標とすべき真理も一つではありません。皆さん、それぞれが探究し、発見し、つかんでいくもの、私たちが生きていくなかで、それ自身が変わり続けるものであると思うのです。その変わり続けるものを見出すヒントとして、大きな一つの道として聖書があり、こういう時間があるのかなと思っています。キリスト教だけがよいわけではなく、キリスト教だけが正しいわけではなく、聖書だけが正しいわけではないと思います。けれども、ここにいる皆さん、せっかく同志社にきたのだから、キリスト教に触れ、聖書に触れて、大いにそれを活用しながら、利用しながら自らの真理を究めていていただきたいと思います。寄り道をする、良いことだけではありません。ただ時間と労力、体力を浪費するだけのことも結構あります。「こんな道、来なきゃよかったな」と思うこともありますし、道に迷うこともあります。けれども全部がきっと無駄ではないだろうと思うのです。時間と体力を浪費しても、その分、足に筋肉がついて健康になっているかもしれないと、前向きに一つひとつ考えていくのも面白いかもしれません。

道に迷っても、旧約聖書の創世記にはこう書いてあります。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る」(28章15節)。神様は私たちとともにいて、本当に迷い、悩むときにも道を失われることなく、いつも支えて導いてくれることを証してくれています。だからこそ私たちが希望を失うことなく、これから先、いろいろな困難があるときに、四方から苦しめられることや、途方に暮れることや、虐げられることや、打ち倒されることもあります。けれども道があることを信じてください。必ず道はあると信じてください。どこかに希望があるに違いないと思いこんでください。行き詰まらず、失望せず、見捨てられず、そして滅ぼされない。救いの手はきっとあります。不思議な御手が皆さんを導いてくださるように私自身も祈りつつ、皆さんとともに歩んでいきたいと思っています。

2011年5月18日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録